

読書随想

今昔物語を読んで

佐伯史談会長

高木嘉吉

(佐伯市藤原)

『今昔物語』を借用して巻頭言を整えたい。『今昔物語』は作者不詳であるが、時代は平安末期鳥羽天皇(一一〇七—一一二二)の時代であろうかと言われている。巻一から巻五まで印度説話、巻六から巻十まで支那説話で、巻十一から巻三十一までが日本の説話である。

仏教に関する説話が多いが、世俗の説話も沢山取り入れている。これによって正史に見えない種々の事件を知ることができる。またこれは、後代の文学にも重大な関係を持っている。即ち従来の説話をこ

こに一旦集合し、更にこの淵叢えんそうから、後代の文学を生み出す母胎の如き作用をもなしている。

『今昔物語』は読まれた方が多いと思うが、読んでいる方には一読をおすすめする。そして皆読んでいるものとして以下筆を進める。

『今昔物語』を貫く理念は、第一は三世輪廻りんねであり、第二は因果応報即ち善因善果・悪因悪果の思想である。

三世は前世・現世・来生で、言葉をかえれば過去・現在・未来である。現在栄えている人は前世で善事

を行った人であり、不如意な人は前世で悪事を行った人である。榮えている人が更に善を行えば、来世は至樂浄土に迎えられ、蓮の台に座ることができる。不如意な人も善意を行えば、来世は浄土に迎えられる。

このように善因善果・悪因悪果の歯車は間違いないく廻って止む時はない。これが三世輪廻の思想である。

広大な土地、多数の人間の上に、三世輪廻が間違なく行われるのは、三世諸仏の靈力が宇宙に充滿して一つも間違えることがないからである。

『今昔物語』の説話は、会員のみなさんもいくつかは幼少時に、家庭であるいは近親の人から聞いていると思う。私も中国の「孟宗が老母に孝を尽して寒中に荀を得た」話を、少年の日に母から聞いた記憶がある。間の伸びた話が多いが、その中に民衆の信仰がうかがえて心を打たれる。

私は敬虔な仏教徒を自任して、菩提寺の行事には

欠がさず参向しているが、信仰の深さ強さにおいて『今昔物語』に出る人々に到底及ばない。人生八十才を越えて、なお迷いの去らない自分の不甲斐なさをかこっている。

